

「ふーん、そっか」

言って、臨也はにやり、と笑う。人の悪そうな笑みだが、それはそれで魅惑的だ。美形はどんな表情も様になるんだな、とぼんやりと思った。

「なんかそういうの、悪くないね。さて、シズちゃんもまいたし帝人君家行こうか」

「そうですね」

こくん、と頷き同意して歩き出す。

「あ、ちよつと待って」

「はい？」

呼び止められ、びた、と止まると振り返って臨也を見上げた。すると臨也の顔が目前に迫り、驚いた瞬間に唇に何かが触れる。それは柔らかい感触だった。

(……え……?)

それは一瞬のことで、すぐに離れた。優しく、臨也が笑う。

「じゃ、行こうか」

(えええええええええ……っ！)

数秒遅れて、理解する。今、自分はキスされた。臨也に触れるだけけど、確実に今のはキスだった。

(は、初めてだったのに……!)

思わず唇を指でなぞる。驚愕なんて言葉じゃ言い表せない。

「なな何するんですかつ！」

「何って、キスだけ。恋人なんだし良いよね」

「良くないですよ。ぜんぜん良くないですよ！」

恋人ごっこにキスが入るなんて聞いてない。かけらも聞いてない。呆然として哑然として愕然とした。

けれど、それ以上文句は言えなかった。あまりにも綺麗に、見とれるほど鮮やかに臨也が笑ったからだ。

(そっかあ。こういう手管で落としていくのかあ)

ぼんやりとそう納得する。

なんというか、怒る気力を根こそぎ奪うような笑顔だ。そんな笑顔を見ているうちに、まあいいか、とあきらめの心境に陥ってくる。

(触れただけだし。動物に噛まれたと思って忘れよう)

結局許してしまうあたり、たぶんこれは良くない傾向だ。臨也の思惑通りだ。そう思いつつ、臨也の隣を歩く。顔が熱を持っているのが自分でもわかった。きっと今の自分は顔が真っ赤に染まっているに違いない。臨也はそれをからかうでもなく、ただ笑う。その笑顔に見とれそうになるのが、ひどく悔しかった。